＜前回：死と死後の世界：煉獄思想の誕生＞

（１）聖書の死生観

１．聖書の生命理解：土の塵から生きる者へ（神の息）

２．聖書の宗教の現世中心主義

５．死後のテーマ化・義人の死と死後の運命

（２）死についてのイマジネーション

６．古代末期における死のテーマ化とその解決としての魂の不死性

７．三層構造世界観と死後世界の文化的表現　→　聖書テキストと文化世界の統合

時間軸と空間軸とにおけるイマジネーションの展開

文字とは別の経路における内面化。　　cf. 仏像、マンダラ

８．キリスト教中世の死と死後の世界：天国／煉獄(purgatorium)／地獄

・世俗に生きる一般の人々（大罪は犯していないが小罪は犯している）の運命、

・聖人の意味・機能：功徳に預かる。

（２）貨幣の正当化と煉獄

９．都市の経済　→　貨幣の需要の増大

10.「貨幣に関して教会で最もしっかりした理論的論争が展開された時代」(55)

・利息付金貸し（高利貸し）の禁止（13 世紀に公会議）

・大聖堂の建設費用、都市での労働において賃金制が重要性を増す。

11. 高利貸しの救済と煉獄

・高利貸しは地獄へ。

・高利貸しの名誉回復、

良きキリスト教徒でありたいという高利貸しの願い、貨幣の流通

↓

煉獄における高利貸しの救済（妻による魂の解放まで高利貸しがとどまっていた中間的居場所としての煉獄。リエージュの高利貸しの話。1220 年頃）

・「儲け主義」は「悪徳と美徳の間」に位置する。

12. 正義（中世の価値体系の最高のものは正義、そして愛徳）にかなった高利貸し＝理にかなった利息率、「正当な価格」

「価格は契約を結ぶ当事者の同意、つまり独自の論理によって行われ、いかなる外部基準にも従わない積極的な価格交渉によって決定される」

13. 高利貸しは慈善家となることで天国に値する人になる。

（３）煉獄の文化

15. 文学：『聖パトリックの煉獄』というテーマがフランスだけでなくヨーロッパ中に広まる。「これら文学作品の創出は、煉獄概念の広まりの因となり果となったと考えられるのである」(46)　　＋　　教会建築・教会美術：

聖書的世界の視覚化、「台頭してきた市民階級、文字の読めない民衆。彼らに、石に翻訳された「聖なる世界」を伝えるには、何よりもわかりやすさが求められた。」（馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー』講談社現代新書、127 頁）

聖母：聖母戴冠・聖母の死・聖母被昇天。黙示録のキリスト：最後の審判。

16. ダンテの『神曲』(1304-08) 上（地獄）中（浄火）下（天堂）、岩波文庫。

・上昇のモティーフ（地獄→煉獄→天国）

・ベアトリーチェ・永遠の女性

ヘレニズム的伝統と聖書的伝統との結合としての西欧

18.「下降運動」「上昇運動」「プラトンにおいては一切は上昇に集中する。ディオティマはその上昇の道をソクラテスに教える役目しか務めぬ。ダンテもギリシア思想の影響を深く受けた人として、中世のカトリック教の典型的詩人として、向上に特に興味を覚えたことは隠れもなき事実である」、「しかしながら、それら凡てのイデアリスム的表現に人格主義の色彩を濃厚に反映させるものは、ベアトリーチェの姿である。「饗宴」篇の女性と全然異なって、この女性は自ら天より降って人を引き上げる神の恵みでなくて何であろうか。」（波多野精一『宗教哲学』（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、429-430 頁））

19. 西欧文学のモチーフ：上昇の旅と永遠の女性

ミルトン『失楽園』、バニヤン『天路歴程』、ゲーテ『ファウスト』（グレートヒェン）

「人生は旅である」、目標としての天国　　cf. 神の国

６．教会建築のコスモロジー

（1）聖なるものの空間性：キリスト教学概論講義（木１）より

１．エリーデの宗教研究：聖なるものが顕現するという現象（＝ヒエロファニー）についての古典的研究。

２．ヒエロファーの実例。山、樹、柱、塔などによってイメージされる（→　世界軸）。

「聖なる山、あなたのいますところ」（詩篇 43.3）、ヤコブのはしご（創世記 28）

「万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる」（ゼカリア 8.3）

３．ヒエロファニーには、次のような構造が伴っている。

(1) 世界の三層構造（三層構造世界観）

(2) 世界軸の周辺におけるコスモスの生成（カオスからコスモスへ）

４．三層構造世界観：「天－地上－地下」　→　伝統社会のコスモロジー

５．世界創世神話：原初のカオスと、神の英雄的偉大な行為によるコスモスの創設。

カオス ― ヒエロファニー ― 英雄神のドラゴン退治

ドラゴン　　コスモス（秩序ある空間）

（古代バビロニアの『エヌマ・エリシュ』）

６．イザナミとイザナキによる「国生み」神話（『古事記』）、天の沼矛

７．「1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。」（創世記 1）

８．ヒエロファニーで生じるのは、聖（非日常性・超越性）と俗（日常性・内在性）の緊張関係であり、ここから宗教を構成する儀礼や神話・思想などが生み出される。

９．古代イスラエルの宗教：聖と俗との緊張　→　神殿神学、祭司と預言者と知者

神が臨在する所・場所、それを人間が建築することの意味。

神の創造の業の模倣。コスモスの更新。

10. ヒエロファニー論は様々な事例に応用可能である。

(1) コスモス・秩序の三重構造（コスモスは三重の構造体となる）：国土－都市－建物

(2) 教会建築のコスモロジー：聖と俗、生と死の空間構造

(3) 都市のコスモロジー：

都の選定は、機能性と意味性の二つの観点から行われる。

平安京の場合。四神相応

（２）教会建築のコスモロジー

11．教会建築の歴史と様式

様式の変化には建築技術の進展の影響もあるが、基本的なことは、世界観（意味空間としてのコスモスの把握の仕方）の変化である。

12．建築の存在様態（森田）

物質的：物体性・合理性・技術性・構造性 → 強さ
事物的：功利性・合目的性・効用性・実用性 → 用
現象的：芸術性 → 美
超越的：超越性・神秘性 → 聖

13．ティリッヒの「建築の神学」：建築の機能と意味

・建築は、意味空間の構成に関わる。
・意味世界：形式（システムを構成する要素の相互連関）と内実（システムの意味根拠。根本的な現実把握・直観）
・形式と内実の関係は、歴史によって規定されている。関係を類型化するとき、それは様式として捉えられる。
・ティリッヒ「造形芸術における宗教的様式と宗教的題材」（『著作集　第七巻』白水社）
「様式とは形式に対する内実の直接的影響作用のことである。形式の提供する無数の可能性のなかで一つの可能性が内的必然性をもって、一つの時代、一つの民族、一つの社会層、一つの教派、一つの学派、一個人、個人の一つ発展段階により実現される。」「あらゆる文化領域における様式はこの統一性に基づいているが、一つの文化圏、一つの文化史的時代区分の同質性にほかならない。様式の統一性の根は共通の内実である。」
「あらゆる文化は、それが内実を表現する限り宗教的である。」
「内実が支配する様式と形式が支配する様式とは共に、様式としては内実の表現なのである。」　↓
19 世紀の近代市民社会：印象派／ 20 世紀の近代への反抗：表現主義

14．教会建築のコスモロジー

・バシリカ形式と集中式
・聖と俗とその境界、方向、上昇・下降、身体性、

＜エフェソ＞

1:23 教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。
4:2 一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、3 平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。4 体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。　5 主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、6 すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。7 しかし、わたしたち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。……　16 キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

5:23 キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。

15．ジャック・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店。

「カロリング朝ルネサンス」

「九世紀はまた、西洋の宗教建築の未来にとっても非常に重要である。ふたつの革新が、ヨーロッパ建築に与えられた第一級の遺贈品となる。ひとつは象徴的な意味をもつ翼廊の導入であり、昔からあるローマのバシリカ式の直線的平面形式に十字架の形を取り入れた。翼廊は八〇〇年頃、サン・モーリス・ダゴーヌ修道院、ケルン大聖堂、ブザンソンの大聖堂で現れる。また同じ時期に、サン・リキエ修道院では、以後もたはやされることになる新機軸、西構えが出現する。西構えは、同時に現れる塔とともに、ロマネスク教会やゴシック教会の西正面を予告しているのである。」（100-101）

16．スコラ的文化総合とゴシック

・アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』（ちくま学芸文庫）

「ゴッシク建築とスコラ学間には、時間と場所という純粋に事実の領域において、とても偶然とは思えない同時発生が存在している。」

「単なる「平行性」以上に具体的」「真性の因果関係」

「ゴシックの建築物の建設者たちがジルベール・ド・ラ・ポレやトマス・アクィナスを原典で読んだということはほとんどありえない。しかしながら彼らは他の無数の仕方でスコラ学的観点にさらされていた。」

「ピエール・ド・モントロー――実にこれまでの建築家のなかで最も論理的な建築家である――はサン＝ジェルマン＝デ＝プレのその墓石で「石工〈博士〉」（Doctor lathomorum）」と呼ばれる。一二六七年までには、この建築家自らが一種のスコラ学者とみなされる至っていたように思われる。」

「視覚芸術は空間の正確で体系的な分割を通して分節されるようになり、その結果、再現芸術においては物語の脈絡の、そして建築では機能的脈絡の、「明瞭化のための明瞭化」を生み出すに至った。」

「盛期スコラ学の〈大全〉と同様に、盛期ゴシックの大聖堂は何よりも「全体性」を目指し、それゆえ、削除と綜合によって一つの完全で最終的な解決に近づいていった。」

17．ティリッヒ「芸術と建築」（『芸術と建築について』教文館）

「それ（バロック）はルネッサンスのヒューマニズムの形式と反対に、宗教的な生の奔出である。バロックの神秘主義は下からやってくる。中世の神秘主義は上からやってくる。・・・遮られつつ突き入る光は神秘的な光であり、今日、近代の教会堂において窓が再び色づけられるとき、私はそれに大いに共感を感じる。」「ステンドグラス」

＜参考文献＞

１．エリアーデ 『永遠回帰の神話――祖型と反復』未来社。
２．クレメンツ『旧約聖書における神の臨在思想』教文館。
３．原野昇・木俣元一『芸術のトポス』（ヨーロッパの中世７）岩波書店。
４．馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー』講談社現代新書。
５．前川道郎『聖なる空間をめぐる――フランス中世の聖堂』学芸出版社。
６．ティリッヒ『芸術と建築について』教文館。
７．森田慶一『建築論』東海大学出版会。